

学生は図書館に何を求めているのか

辻 高明

長崎大学 大学教育イノベーションセンター

What Do University Students Want from Library?

Takaaki TSUJI

Center for Educational Innovation, Nagasaki University

Abstract

This study clarified what university students want from libraries. First of all, it was noted that they recognize that the library was a place to study and read quietly before entering university. Then, through this study, it was revealed that what university students want from the library is as follows. “Communication with faculty members through books”, “Assigning homework that requires the use of books”, “Using the library facilities to interact with people inside and outside the university”, “Publicizing the library through active information dissemination”, “Relaxing space that can be used between self-study”, and “Using enriched services such as free drink service and rental of chargers”. In addition, this study clarified the similarities and differences between general students and students aiming to obtain librarian qualifications in terms of what they want from learning support services in the library.

Key Words : University Library, Student Opinion, Learning Support Service,

Qualitative Research

1. はじめに

近年、大学図書館の学習支援の拠点化が推し進められている。多くの大学で学生自身のノートPC 必携化が進み、学生は図書館にある蔵書や資料だけでなく、ノート PC を用いて電子資料を検索、閲覧するために学術情報基盤を利用している。さらに、近年の図書館は、ラーニングコモンズ（Learning Commons : LC）が新設されアクティブラーニング拠点としても変革されている。

そうした大学図書館の変革は、2008 年度中央教育審議会の答申「学士課程教育の構築に向けて」などの学士課程教育の質的転換への要請、さらには、2009 年度の学術分科会の「大学図書館の整備及び学術情報流通の在り方について」の審議等、国からの要請に応える形で進められてきた。一方、その中で各大学では、図書館のユーザである学生

の意見や考えを把握する取り組みも行われてきた。

例えば、山鹿（2009）は、法政大学の司書課程科目「図書館特論」の授業において、司書資格取得を目指す学生 27 名に対し「大学図書館の学習支援サービスはどうあるべきか」というテーマで話し合いをさせ、学生の意見や声を質的に分析している。そして、「場としての図書館」「学習支援（資料情報、情報発信、情報リテラシー教育）」「図書館との連携」「図書館への期待と今後」という学生の意見や考えに関する 4 つのカテゴリーを抽出している。また、逸見ら（2010）は、新見公立短期大学で、学生に対し図書館に関するアンケート調査を行い、図書館の利用実態と課題を明らかにしている。同じように、李ら（2013）は、大阪物療大学で、学生にアンケート調査を実施し、図書館サービスに対する認知度、利用度、満足度

について把握している。そうした学生へのアンケート調査は論文として公開されていなくても、図書館職員によりさまざまな大学で定期的の実施され、業務改善の参考にされている。

上述の逸見ら（2010）、李ら（2013）のように、図書館による学生に対するアンケート調査は実施されているものの、それらは、図書館の利用状況や満足度を数値的に把握することが目的である。また、山鹿（2009）は学生に話し合いを行わせ、そのやり取りを質的に分析しているが、対象が「図書館特論」を受講している司書資格取得を目指す特殊な学生であり、一般利用者に当たる学生ではない。さらに、それら先行研究は、国からの答申や審議が出された後、数年の間に実施されており、各大学で図書館改革が進む昨今の学生の意見や考え、図書館へのイメージを明らかにしたものではない。

2. 研究目的

本研究では、昨今、大学図書館の変革が進む中で、「学生は図書館にどのようなイメージを持っているのか？」「学生は図書館に何を求めているのか？」を明らかにする。特に、司書課程の学生ではなく、一般の学生として本学の学生を対象とする。また、学生の意見や考えを掘り起こすために、アンケート調査への回答ではなく、図書館を舞台もしくは題材としたアクティブラーニングの実践を用いる。図書館を舞台としたアクティブラーニングとは、図書館で実際に実施したアクティブラーニングを指し、それにより学生が図書館に持つイメージを明らかにする。図書館を題材としたアクティブラーニングとは、通常の授業内で行った図書館をテーマとしたアクティブラーニングのことを指し、それにより学生の持つ図書館への意見や考えを明らかにする。

本研究では、図書館を舞台もしくは題材としたアクティブラーニングとして、著者が所属大学の担当授業の中で行った実践を用い、また、学習支援サービスの中心的な利用者である 1, 2 年生を対象とする。そして、学生が図書館に持つイメージや、図書館への意見や考えを明らかにした上で、図書館のサービスや取組の改善のための示唆を得

ることを目指す。

3. 研究方法

3.1 研究対象とする実践

本研究では、図書館を舞台もしくは題材としたアクティブラーニングとして、以下の実践Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳの4つの実践を対象とする。図書館を舞台としたアクティブラーニングが実践Ⅰ、図書館を題材としたアクティブラーニングが実践Ⅱ、Ⅲ、Ⅳである。なお、学生は各実践により異なっており、重複した受講はない。

3.1.1 実践Ⅰ：「1 年生前期」を対象とした実践

1 年生が前期に受講した初年次セミナーの「図書館を利用したアクティブラーニング」（2022 年度前期）の実践である。本実践では、図書館のラーニングコモンズやメディアライブラリーといった環境を使ってアクティブラーニングを実施した（図 1）。そして、終了後、今後どのように図書館を利用したいか、実践を通して図書館へのイメージがどのように変化したかについて把握するため、学生に「振り返りシート」への記述を求めた。



図 1 実践Ⅰの様子

3.1.2 実践Ⅱ：「1 年生後期」を対象とした実践

1 年生が後期に受講した「大学での学びを共に創る」（2021 年度開講）において 2 コマ分を使用し、「図書館の問題点と改善策」について考えた実践である（図 2）。参加学生数は 23 名であり、4 名から 5 名で構成されるグループを 5 つ編成した。また、本実践は、個人での事前ワークシートの作成、グループでの話し合い、グループでのホワイトボードを使った発表という 3 ステップで実施した。

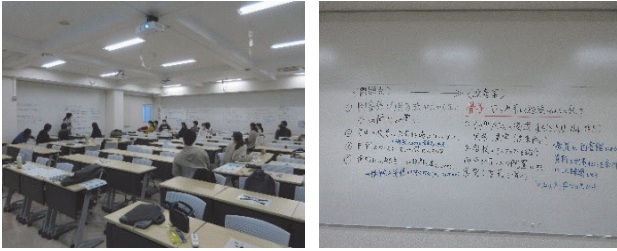


図2 実践Ⅱの様子とホワイトボード

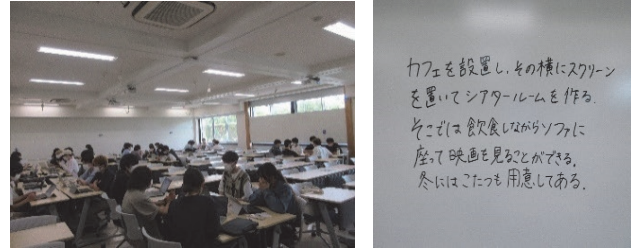


図4 実践Ⅳの様子とホワイトボード

3.1.3 実践Ⅲ：「2 年生前期」を対象とした実践

2 年生が前期に受講した「大学教育学入門」（2022 年度開講）において 2 コマ分を使用し、「図書館の問題点と改善案」について考えた実践である（図 3）。参加学生は 30 名であり、5 名で構成されるグループを 6 つ編成した。また、本実践は、個人での事前ワークシートの作成、グループでの話し合い、グループでのホワイトボードを使った発表という 3 ステップで実施した。

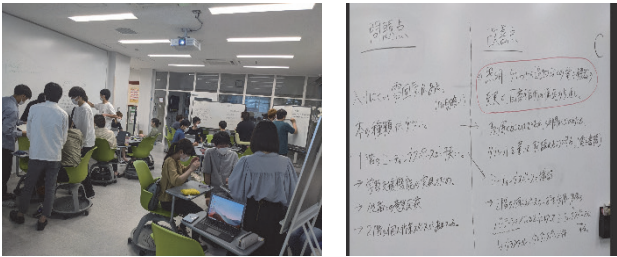


図3 実践Ⅲの様子とホワイトボード

3.1.4 実践Ⅳ：「2 年生前期」を対象とした実践

2 年生が前期に受講した「学術への扉」（2022 年度開講）において 1 コマ分を使用し、「図書館の学生の利用者増のためにはどうしたらよいか？」について考えることで、図書館の改善案について検討した実践である（図 4）。参加学生は 47 名であり、4 名から 5 名で構成されるグループを 10 つ編成した。本実践では、グループごとに、アイデアを出す発想法であるブレイン・ライティング・シートを用いて図書館の改善案を考えた。ブレイン・ライティング・シートとは、アイデアを書いたシートを回覧板のようにグループの他のメンバーに回していき、多くのアイデアを出し、それらを整理してアイデアを集約していく方法である。最終的に、各グループで集約したアイデア一つをホワイトボードに記述した。

3.2 使用するデータ

本研究では、図書館を舞台もしくは題材としたアクティブラーニングにより引き出される、学生が図書館に持っているイメージ、図書館への意見や考えを明らかにする。そして、実践Ⅰでは、終了後の学生の「振り返りシート」の記述をデータとして使用する。また、実践Ⅱ、Ⅲ、Ⅳでは、各グループで行ったアクティブラーニングの最終成果である「ホワイトボード」への記述をデータとして使用する。本研究では、それら質的データを用いる。

3.3 データ分析の手続き

本研究では、3.2 で収集した質的データについて修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（木下 2003）のプロセスを参考に分析を行う。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチは事象の「概念化の研究」を特徴とした質的研究法である。本研究では、分析テーマについて、特に、反復して出ている言葉や文章を抽出し、事象を浮かび上がらせる。そして、それを「概念」レベルで把握するためにラベリングを行い、「カテゴリー」を生成する。具体的には、実践Ⅰでは、振り返りシートの記述で反復して出てくる言葉や文章、実践Ⅱ、Ⅲ、Ⅳでは、ホワイトボードの記述で複数のグループが記述している言葉や文章を抽出し、その上で、それらを事象として概念レベルで把握するために、カテゴリーを生成する。さらに、それらカテゴリー同士を関連付けることで、「学生は図書館にどのようなイメージを持っているのか？」「学生は図書館に何を求めているのか？」を明らかにし、それをもとに図書館のサービスや取組の改善への示唆を得る。

4. 結果と考察

4.1 実践Ⅰにおける事例分析と考察

実践Ⅰは、実際に図書館で、図書館を利用したアクティブラーニングの講義や実習を行い、終了後、学生に「振り返りシート」の記述を求めた。表1に振り返りシートの感想例を示している。

本実践は図書館で実際にアクティブラーニングを行うものであるため、終了後の振り返りシートには、「以前は図書館は静かで、本を読んだり勉強を行う場所というイメージがあったが、アクティブラーニングを通して、ディスカッションやアクティブラーニングを行うためにも利用したいと思った。」「今までは図書館は静かに本を読んだり、勉強したりする場所というイメージがあった為、今回の授業でイメージが変わり、もっと利用していきたいと思った。」というように、アクティブラーニング拠点としての図書館に対する気付きと、今後のアクティブラーニングのための図書館利用の感想が多数あった。

ここでは、実践Ⅰが1年生の前期の受講ということに鑑み、大学に入学して間もない時点での学生の図書館へのイメージを明らかにする。具体的には、回答が得られた106名の振り返りシートの記述から、高校時代までの図書館へのイメージが窺える記述に着目し、入学して間もない時点での学生が持つ図書館へのイメージを特定する。

まず、振り返りシートで頻出していた言葉や文章として、「静かに黙々と過ごす場」「静かでピリッとした雰囲気」「静かなイメージ」「静かにしなければならない場」といった、図書館は静寂を保たなければならない場であるという記述が34件あった。次に、「自習の場」「一人で勉強する場」「一人で勉強するところ」といった、図書館は自習の場であるという記述が18件あった。さらに、「本を借りる場」「本を読む場」といった、本に関連する記述が31件あった。

<考察とカテゴリーの生成>

本実践事例で、入学して間もない1年生が高校時代までに持っている図書館へのイメージは、静寂を保って自習する、本を借りたり読んだりする場であることが分かった。そのため、図書館を利

用したアクティブラーニングの実践を新鮮に感じていたことが窺われる。以上より、実践Ⅰから、大学入学時点での図書館へのイメージについてカテゴリーを生成し、カテゴリー①「静寂を保って一人で自習したり、本を読む場」とした。

4.2 実践Ⅱにおける事例分析と考察

実践Ⅱは、1年生が後期に受講した実践であり、事前ワークシートの作成、グループでの話し合い、グループでの発表という手順で、各グループで「図書館の問題点と改善案」を考えた実践である。本実践では、全5グループが、グループ毎に最終案を「ホワイトボード」にまとめた。表2に結果を示す。

まず、図書館の問題点として、「教員と学生の交流の少なさ」「学生と教員が共有する場になっていない」といった図書館で教員と学生が交流していないことが複数のグループで挙げられていた。また、「自習スペースとしてしか使われていない」「課題だけの利用場所になっている」「自習のみ」といった、図書館が自習室としての利用に限られているという指摘が複数グループから挙げられていた。

次に、図書館の改善案として、「教授のオススメ本を紹介」「教員のおすすめ本を紹介する」というように、教員が学生向けに本を紹介する取組の必要性が複数のグループで挙がっていた。また、「授業の課題で図書を利用する機会を作る」「教員が図書館にある資料を利用することを条件にした課題を出す」「小テストの代わりとして課題図書のレポート」というように、授業のレポート課題の作成のために本を使うようにする案が複数グループから挙げられていた。

<考察とカテゴリーの生成>

本実践事例で、繰り返し出現していた「問題点」と「改善案」から、学生は、図書館が自習室としての利用に限定されていることを問題点として捉えており、図書を媒介にした教員とのコミュニケーションを求めていることが窺えた。さらに、教員に対して課題を出す上での工夫を求めている。以上から、実践Ⅱからは、カテゴリー②として

「図書を媒介にした教員とのコミュニケーション」、カテゴリー③として「教員の課題提示における図書の利用」を生成した。

4.3 実践Ⅲにおける事例分析と考察

実践Ⅲは、2年生が前期に受講した実践であり、事前ワークシートの作成、グループでの話し合い、グループでの発表という手順で、各グループで「図書館の問題点と改善案」を考えた。本実践では、全6グループが、グループ毎に最終案を「ホワイトボード」にまとめた。表3に結果を示す。

まず、図書館の問題点として、「誰しもに開かれている場所ではない」「学外の市民との接点がない」「学生同士の連携が取れない」というように、図書館で学外者を含む他者との接点が少ないことが複数のグループが挙げていた。また、「ミーティングスペースが狭い」「施設のポテンシャルを持て余している」というように、施設のスペースが有効に利用されていないことを複数グループが問題点として挙げていた。

次に、図書館の改善案として、「情報発信を積極的にする」「チラシとか作って情報発信」「広告作り」「地域への呼びかけ（大学図書館の良さ宣伝）」というように、複数のグループが情報発信の重要性を挙げていた。

<考察とカテゴリーの生成>

本実践事例で、繰り返し出現していた「問題点」と「改善案」から、学生は、図書館で学内外の異なる他者（他の学生、教員、学外者）との交流を求めていることが示唆された。さらに、そのために施設のスペースやポテンシャルを有効に使うべきと考えていることが窺えた。そして、学内外への情報発信を積極的に行い、図書館の良さを周知することが重要であると考えていることが窺えた。以上から、実践Ⅲからは、カテゴリー④として

「館内の施設やスペースを活用した学内外の他者との交流」、カテゴリー⑤として「積極的な情報発信による図書館の周知」を生成した。

4.4 実践Ⅳにおける事例分析と考察

実践Ⅳでは、2年生が前期に受講した実践であり、全部で10のグループを構成し、ブレイン・ライティング・シートを使って図書館の改善案を考えた実践である。グループ毎に最終案を「ホワイトボード」にまとめた。結果を表4に示す。

各グループから出された改善案の中で、繰り返し出ていた言葉として「リラックス」「カフェ」「ドリンク」「無料」「充電器」が挙げられた。すなわち、学生は「無料のドリンクサービスがあり、カフェのようなリラックスできる空間」を求めていること、さらに「無料で利用できる充電器がある」と便利であると思っていることが窺えた。実践Ⅳは、発想法であるブレイン・ライティング・シートを用いて考えたため、学生の直感的な意見や考えが多かった。

<考察とカテゴリーの生成>

図書館を自習室として利用する学生は多い。しかし、本実践事例で繰り返し出現していた「改善案」から、学生は自習室それ自体の変革ではなく、むしろ、自習の合間の休憩時間に利用可能なリラックスできる空間の拡充や、飲食を含めた各種サービスの充実を求めていることが示唆された。つまり、学生は自習室そのものの充実よりも、勉強の合間の時間に過ごすスペースの充実を求めていることが窺えた。そして、実践Ⅳからは、カテゴリー⑥として「自習や勉強の合間に利用可能なリラックスできる空間」、カテゴリー⑦として「無料のドリンクサービスや充電器などの貸出サービスの充実」を生成した。

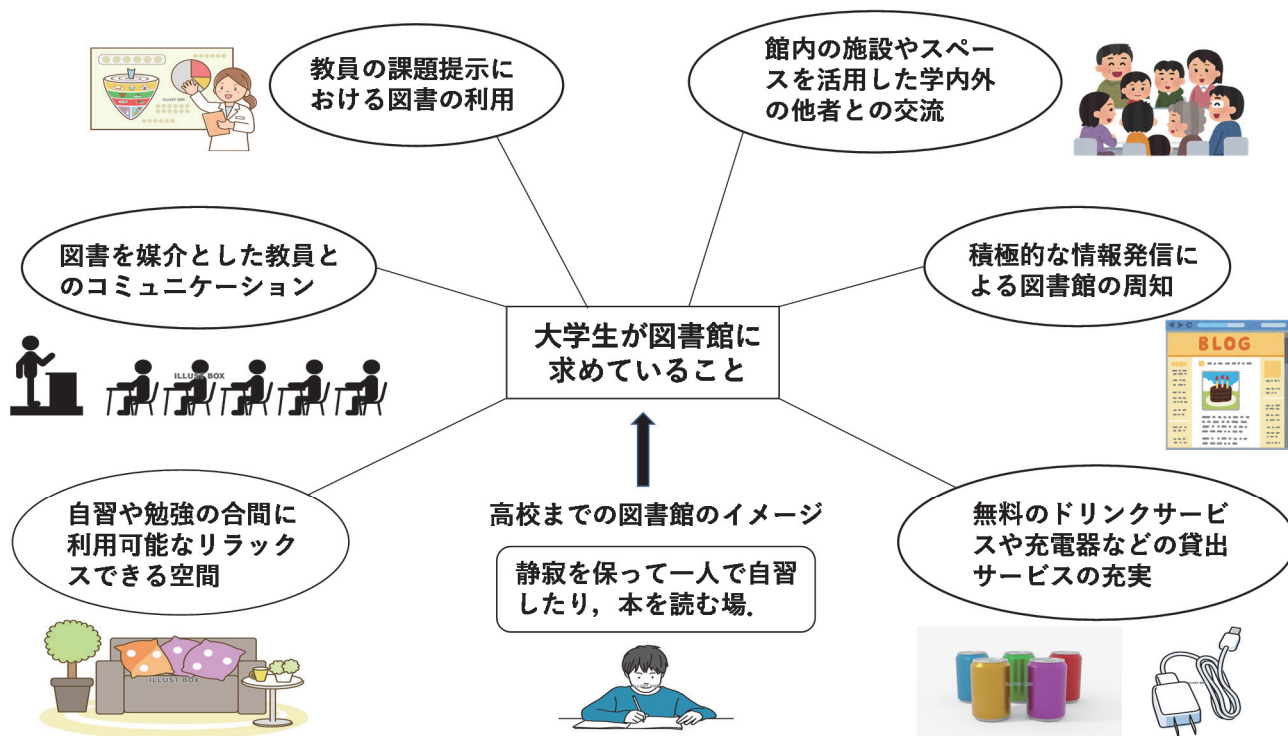


図5 学生が図書館に求めていること

4.5 全体的考察と図書館のサービスや取組への示唆

実践ⅠからⅣでは、データから反復して出てくる言葉や文章に着目し、それらを概念レベルで把握するために各実践でカテゴリーを生成した。具体的には、本研究でカテゴリー①～⑦を生成した(図5)。

実践Ⅰで生成したカテゴリー①「静寂を保って一人で自習したり、本を読む場」から、学生は入学時点では図書館について「自習室」「自習の場」というイメージを持っていることが分かる。昨今、図書館が自習の場としてだけでなく、アクティブラーニング拠点としても変革されていることを踏まえれば、ラーニングコモンズなどの利用方法を周知し、積極的な施設の利用を推し進めていくことが重要といえよう。

実践Ⅱで生成されたカテゴリー②「図書を媒介とした教員とのコミュニケーション」、カテゴリー③「教員の課題提示における図書の利用」から、図書館での教員、図書、学生の交流をデザインした取組が重要であることが示唆された。データに

も記載があったが、図書館で教員と学生が共に参加、交流するビブリオバトルを開催するなどのイベントが求められるだろう。また、教員は学生に図書館の本を利用させる授業課題の設計も意識した方がよいだろう。

実践Ⅲで生成されたカテゴリー④「館内の施設やスペースを活用した学内外の他者との交流」、カテゴリー⑤「積極的な情報発信による図書館の周知」から、学生は図書館が交流拠点、交流の場であって欲しいと思っていることが窺えた。そして、情報発信により図書館を知ってもらうことが重要性であると考えていた。図書館は集いの場としての特徴として、学部や学年、立場や身分が異なる学内外の多様な人々が利用できるという点がある。学生は、図書館が多様な人々を呼び込み、知や学びの交流を促進していくことを求めているといえるだろう。

実践Ⅳで生成したカテゴリー⑥「自習や勉強の合間に利用可能なリラクセスできる空間」、カテゴリー⑦「無料のドリンクサービスや充電器などの貸出サービスの充実」から、学生は自習室とし

て図書館を利用する場合、自習室そのものの変革よりも、自習の合間の時間に過ごすスペースの変革を求めていることが示唆された。すなわち、居心地よく休憩時間を過ごすために、飲食可能なリラックスできる空間、充電器の貸出などの各サービスの充実を求めていることが窺えた。自習する学生の学習効果を高めるために、自習以外の時間やスペースの充実が必要といえるだろう。

4.6 関連研究の結果との類似点と相違点

1.で述べた山鹿（2009）では、「司書資格取得を目指す学生」を対象に、図書館の学習支援サービスについて話し合いをさせ、学生の意見や声を分析していた。本研究では、「一般利用者である学生」（以下、一般学生）を対象に、アクティブラーニング実践を通して、学生の意見や考えを引き出し分析した。山鹿（2009）の結果と本研究で得られた結果との類似点と相違点について、以下にまとめる。

まず、類似点として、学生は情報発信による図書館の周知を求めていることが挙げられる。つまり、司書資格取得を目指す学生も一般学生も、図書館のサービスや取組が学生にあまり伝わっていないことを問題として考えており、「図書館の広報活動の見直し」を提案している点が共通していた。

次に、相違点としては、図書館での人的交流を求めている点は共通していたものの、司書資格取得を目指す学生は、「図書館職員とのコミュニケーション」が重要であると考えていたのに対して、一般学生は、「学内外の他者とのコミュニケーション」を求めている点が挙げられる。具体的には、司書資格取得を目指す学生は、「職員が不愛想で暗い」「職員に声をかけにくい雰囲気がある」ことを問題として考えており、学生と図書館職員との積極的なコミュニケーションを重要視していたが、一般学生は、図書を媒介とした教員とのコミュニケーションや、館内での学外の市民や他の学生とのコミュニケーションを求めている。また、司書資格取得を目指す学生は、「職員のこれが好きだという 1 冊を紹介する」「職員のお勧め本を紹介するコーナーを」というように、学生は図書

館職員の選書を読みたいと思っていると考えていたが、一般学生は、「教授のオススメ本を紹介」「教員のおすすめ本を紹介する」というように、教員の選書を読みたいと考えていた。

さらに、相違点として、飲食可能でくつろげる会話の場を求めている点は共通していたものの、司書資格取得を目指す学生は、グループ学習ができる場所やソファ、談話室での飲食を求めているのに対して、一般学生は、自習や勉強の合間にくつろげる「休憩の場所」を求めている点が挙げられる。一般学生も、実践Ⅱ、Ⅲの結果から得られた通り、図書館が自習の場の利用に限定されがちなことは問題として捉えており、施設を利用した他者との会話が必要だと考えているが、一般学生は、学習に限らず、純粋な休憩のための場の拡充を求めている。さらに、休憩時間における無料のドリンクの提供や充電器の貸出といった手厚いサービスを求めている。

その他、司書資格取得を目指す学生は、資料の収集、提供の便利さや早さを重要視しており、「資料の入手方法は簡単で便利であって欲しい」「必要な資料は手間をかけずにすぐに手に入れた」といった要求を挙げていたが、一般学生を対象にした本研究ではそうした要求は見られなかった。それは両研究の対象者の違いの結果というだけでなく、山鹿（2009）が行われた 2008 年時と現在とを比べると、図書館は蔵書だけでなく学術情報基盤が整備され、学生自らがさまざまなデータベースから電子的な資料を容易に検索、収集できるようになった背景もあると推察される。さらに、司書資格取得を目指す学生は、図書館での情報リテラシー教育（パワーポイント講座、文章の書き方講座、レポート作成講座、メディアリテラシー講座など）を求めているが、一般学生を対象にした本研究ではそうした要求は見られなかった。それも両研究の対象者の違いの結果というだけでなく、2008 年時と現在とを比べると、本学でも初年次セミナーや情報基礎科目を新入生全員が受講することになったように、教養教育で情報リテラシー教育に関する内容を多く扱うようになった背景もあると推察される。

以上の通り、両研究の対象者の違い、及び対象

者と実施時期の違いが分析結果に対してもたらした違いとして、まず、一般学生は、司書資格取得を目指す学生ほど、図書館職員とのコミュニケーションを必ずしも積極的に求めてはおらず、むしろ学内の教員、学生とのコミュニケーションや、学外者との交流を求めていることが分かった。つまり、より多様な他者との交流を求めている。また、司書資格取得を目指す学生は、個人利用であれ、グループ利用であれ、あくまで図書館を学習の場として捉える傾向があったが、一般学生は、学習のための場としてだけでなく、その合間にくつろげる場であることも強く要望していた。そのため、くつろぎや利便さのためのサービスの充実を求めていることが分かった。また、司書資格取得を目指す学生は、資料の収集や見せ方を重要視しており、また、情報リテラシー教育も図書館に期待していたが、昨今、学術情報基盤が整備され、大学教育の内容も変化する中で、現在の一般学生は、必ずしもそうした期待を持っていないことも窺えた。すなわち、時代とともに、図書館やそこで働く職員の役割も変化しなければならないことも示唆された。一方、図書館のサービスや取組の周知や広報の改善は、時代を問わず、重要検討課題であることも分かった。

表1 実践Ⅰの振り返りシートの記述例

感想例：以前は図書館は静かで、本を読んだり勉強を行う場所というイメージがあったが、アクティブラーニングを通して、ディスカッションやアクティブラーニングを行うためにも利用したいと思った。
感想例：図書館は静かに本を読んだり、自習を行ったりする場所だと思い込んでいたけれど、今回図書館でネゴシエーションやアクティブラーニングを行うことによって、話し合いを行ったり、様々なことを行える場所だと分かりました。話すことが許されている部屋などで、これから課題やプレゼンを作る時に利用したいと思いました。
感想例：図書館は静かに使うべきというイメージから、自分達が能動的に動いて活用していい場所だというイメージに変化した。
感想例：静かなイメージがある図書館で「アクティブラーニング」を行えたことは斬新的で清々しいような気持ちになった。図書館での勉強の仕方が変わった。
感想例：話し合いをたくさんしてよいことが分かった。静かに自分一人で作業をするイメージだったが、もっとアクティブな場であると思った。自分のことにとらわれないように、他者を知ることができるような活動をしたい。
感想例：図書館は静かに本を読むというイメージでしたが、話し合いやネゴシエーションをする場であることを今回の授業でより詳しく知りました。これからの大学生活でどんどん活用していきたいです。
感想例：社会に出て働くようになると、プレゼンなどの機会は多くあると思う。そのようなときに必要になる力は図書館で養えると感じた。積極的に利用していきたい。
感想例：今までは図書館は静かに本を読んだり、勉強したりする場所というイメージがあったが、今回の授業でイメージが変わり、もっと利用していきたいと思った。
感想例：これまで静かに黙々と過ごす場所というイメージが強かったのですが、今回の授業を通して、もっと活発に周りの人を巻き込んで活動できる場所だと感じました。今後は、自分の力を磨くためにも他の設備や利用方法を知って活用したいと思いました。
感想例：大学図書館は本を読むだけの場所ではなく、今回のアクティブラーニングのように、意見を交換し合うことができる場所なのだとわかりました。知識や意見を一方向から与えられるのではなく、相方向に与え合い、学びを深める使い方をこれからもしていきたいです。
感想例：高校までとは違い、大学図書館は自分自身の積極性にも重きを置いているようなイメージを持ちました。自分は今後、読書や勉強のためだけではなく、他者との意見の交流場としても使っていこうと思いました。
感想例：今まで図書館は一人で黙々と作業をする場だと感じていましたが、今回の活動を通じて友達と意見を交換し、考えを深める場でもあったと思いました。
感想例：大学図書館では「本を貸る場所」「自習をする場所」というイメージが強かったが、今回の授業を通して「学びを深める場所」という認識になった。学びを深めるといっても、一人だけでなく大人数でもできるのが図書館の強みであり役割であると思った。
感想例：積極的に活用していきたい。図書館のイメージが変わった。中学高校での図書館とは違い、大学という高等教育での学びに適した施設がしっかりしているのだと安心し、これからの学びへの意欲がわいた。

表2 実践Ⅱの各グループのホワイトボードの記述

グループ1	<p><図書館の問題点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生が本を利用して勉強することへの弊害 ・図書館の社会（地域）のつながりの希薄さ ・教員と学生の交流の少なさ ・多面的な図書館員への依存 ・情報電子データベースに関する問題 <p><図書館の改善案></p> <ul style="list-style-type: none"> ・骨子「学生の主体性を促す」 ・蔵書数を増やす（学生にとって必要な資料） ・授業内での図書館利用 ・教員との交流の場を増やす ・教員のおすすめ本を紹介する ・有志の学生を集めて企画を教員に提案する ・従来のライブラリアンに求められるスキルからの脱却 ・公的なイベントを図書館中心で行う
グループ2	<p><図書館の問題点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・図書館の利用者が少ない ・図書館ガイダンスが機能していない <p><図書館の改善案></p> <ul style="list-style-type: none"> ・骨子「学生の書籍との接触機会の増加を目指す」 ・図書館ガイダンスの再構築 ・電子書籍の利用促進 ・図書館利用の一部義務化 ・図書館の滞在時間、回数の義務化 ・小テストの代わりとして課題図書レポート
グループ3	<p><図書館の問題点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・図書館の利用方法が分からない、 ・本への関心が薄い、 ・学生と教員が共有する場になっていない、 ・自習スペースとしてしか使われていない、 ・情報化の拠点としての役割を果たしていない、 <p><図書館の改善案></p> <ul style="list-style-type: none"> ・骨子：本を利用して勉強するように促す ・利用方法の掲載、実際に授業内で見学、 ・教授のオススメ本を紹介 ・教員が図書館にある資料を利用することを条件にした課題を出す、 ・本が目に入る配置にする、 ・電子書籍を増やす
グループ4	<p><図書館の問題点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・図書館を読書目的で利用する学生が少ない（自習のみ）、 ・紙媒体の本の需要が減少しつつある、 <p><図書館の改善案></p> <ul style="list-style-type: none"> ・骨子：図書館の利用者を増やす ・授業の課題で図書を利用する機会を作る、 ・会話できる場所を増やし、アクティブラーニングを自主学習でも取り入れる、 ・施設としては学習をメインにする、 ・電子図書館の宣伝をする、 ・本を紹介してくれるシステムを作る
グループ5	<p><図書館の問題点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・図書館が課題だけの利用場所になっている、 ・施設が複雑で利用しづらい（どこにどのジャンルの本があるか分からない、会話をしているスペース、飲食が可能なスペースが分かりづらい）、 <p><図書館の改善案></p> <ul style="list-style-type: none"> ・骨子：双方向へのアプローチ ・紹介本やポップを作って読むきっかけを作る、 ・掲示を増やす ・興味を持つ本を増やす ・アプリを作る（図書館全体のマップ、書籍検索、学習スペースの予約、リクエスト） ・地域の人にも入りやすくする、 ・大学の図書館に充実している専門書などの貸出を増やす、

表3 実践Ⅲの各グループのホワイトボードの記述

グループ①	<p><図書館の問題点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・電子機器の普及により本の利便性の低下 ・本自体がかたくなる <p><図書館の改善案></p> <ul style="list-style-type: none"> ・骨子：本のススメ ・POP、広告作り ・ドラマや映画の原作等の取り入れ及び広告 ・読書の習慣付け ・本を使った課題や講義の取り入れ
グループ②	<p><図書館の問題点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学内の利用者が少ない ・学外の市民との接点がない ・学生同士の連携が取れない ・本を読むより勉強するために図書館を利用している人が多い <p><図書館の改善案></p> <ul style="list-style-type: none"> ・おすすめの本を紹介するイベントを作る ・地域への呼びかけ（大学図書館の良さ宣伝） ・レポートの書き方、情報リテラシーの教養 ・チラシとか作って情報発信 ・本を読むような環境を作る
グループ③	<p><図書館の問題点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・本が多くどの本を参考にすべきか分からない ・新書を頼みにくい ・同時に同じ本が複数人で借りられない ・誰しにも開かれている場所ではない <p><図書館の改善案></p> <ul style="list-style-type: none"> ・骨子：みんなが自主的に行くような図書館へ ・教員のおすすめ本をまとめる ・使用しない本をしまって新書を置く ・新書の依頼カードを分かりやすい場所に置く ・電子コンテンツの拡充 ・講義での使用を増やす
グループ④	<p><図書館の問題点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生が本を利用する目的で利用することが少ない（主として勉強目的での利用） ・足を伸ばしながら本を読むスペースが少ない <p><図書館の改善案></p> <ul style="list-style-type: none"> ・骨子：ビブリオバトルなどで本の魅力をアピールする、 ・取り扱う本の種類の増加 ・世代に合った本を取り入れる ・ビブリオバトルの本を借りた時にポイントを付与、 ・足を伸ばしながら本を読むスペースをつくる、
グループ⑤	<p><図書館の問題点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・施設のポテンシャルを持て余している ・図書館が開いている時間 ・電子図書の存在を知らない人が多い ・利用の仕方が分からない ・認知活動が進んでいない <p><図書館の改善案></p> <ul style="list-style-type: none"> ・骨子：電子図書を充実させ、情報発信を積極的にする、 ・電子図書館を普及させる、 ・部数に限りがあり不便 ・強制的に使用させる ・電子図書に授業テキストを借りられるようにする
グループ⑥	<p><図書館の問題点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・入りにくい雰囲気がある ・本の種類が少ない ・ミーティングスペースが狭い ・個人作業スペースが余っている <p><図書館の改善案></p> <ul style="list-style-type: none"> ・骨子：照明、タブレット追加などの電子機器の充実と図書館内の構造の見直し、 ・タブレット置いてすぐに読めるようにする（電子書籍） ・ミーティングスペースの増設 ・個人スペースの一部をパーティションなどで仕切って、ミーティングスペースにする、

表4 実践Ⅳの各グループのホワイトボードの記述

グループA	「試験勉強等に役立つ教材や世間一般に話題になっている本を目立つところに設置する」
グループB	「授業やゼミの一環の中に図書館蔵の書籍や論文の活用を組み込む」
グループC	「パソコンや携帯の充電器を無料で利用できる場所をつくる」
グループD	「本を一定の冊数を借りると様々なオプション（漫画、映画、充電スペース、個室、冷暖房完備etc）が付いたカフェスペースでの利用ができる」
グループE	「勉強の合間を充実させるために飲食スペースにドリンクバー、マンガ、yogiboを置く」
グループF	「リラックスできるスペースとして個室をつくる（ドリンク一杯無料、強力なwifi完備）」
グループG	「カフェを設置し、その横にスクリーンを置いてシアタールームを作る。そこでは飲食しながらソファに座って映画を見ることができる。冬にはこたつも用意してある」
グループH	「1Fにスタバを置くことで図書館に行きやすくリラックスできる。図書館を楽しめるような空間作り」
グループI	「ドリンクの販売と充電器の貸し出しがあり、屋上のテラスがある居心地の良い空間にする」
グループJ	「BGMをかけるエリアを作り、かけたい曲のリクエストやアンケートを行う。曲と曲の間にお知らせをする」

5. まとめと今後の課題

本研究では、学生が、大学図書館のサービスや取組に何を求めているかを、アクティブラーニングの実践結果の分析を通して明らかにした。

その結果、まず、学生は図書館に対して入学前から自習室というイメージを持ち、入学後もそうした利用を続けながらも、一方で、教員、学生、学外者との人的交流拠点としても期待していることが分かった。

まず、自習室としての利用の場合、学生は、自習室そのものの充実よりも、自習や勉強の合間に過ごす休憩時間に利用できるサービスの充実を求めている。すなわち、休憩時間を居心地よく過ごすために、リラックスできる空間、無料のドリンクの提供、充電器の貸出といった各種サービスの拡充を求めていることが分かった。よって、図書館にラーニングコモンズやグループ学習室だけでなく、リラックスできる会話の場を提供し、充実したサービスを提供することが重要であることが示唆された。

一方で、人的交流拠点としての図書館への要求も見られた。具体的に、学生は教員との本を媒介

としたコミュニケーションや、学外の人も含めた他者との交流を求めている。そのことから、学生の知識や学びの創発を促進するような人的交流を効果的にデザインすることが図書館の重要な課題であることが示唆された。また、昨今、図書館がアクティブラーニング拠点として変革されているものの、そうした拠点への期待や要望が十分には挙げられておらず、ラーニングコモンズなどの施設の利用の方法や利用価値について周知、広報していく必要があるといえよう。

さらに、司書資格習得を目指す学生を対象とした研究の結果と、一般学生を対象とした本研究の結果とを比較した場合、まず、類似点として、

「図書館の広報活動の見直し」が、いつの時代も重要検討課題であることが分かった。そして、相違点として、一般学生は、司書資格取得を目指す学生よりも、学内の教員、学生とのコミュニケーションや、学外者との交流を求めていることが確認された。よって、より多様な他者との交流のための取組が重要となることが示唆された。また、一般学生は、図書館を学習のための場としてだけでなく、学習の合間でくつろげる場であることも強く期待していた。そのため、今後は、くつろぎや利便さのための充実したサービスの提供が重要といえよう。また、一般学生は、昨今の学術情報基盤の整備や大学教育の内容の変化もあり、図書館職員に資料の収集や見せ方、あるいは情報リテラシー教育を必ずしも求めていることも窺えた。時代とともに、図書館の機能やそこで働く職員の役割も変化しなければならないといえよう。

本研究では、学習支援サービスの中心的な利用者である1、2年生を対象とし、アクティブラーニング実践の分析を通して、学生が図書館に持っているイメージや、図書館への意見や考えを明らかにした。今後は、専門教育やゼミが本格的に始まる3年生以上を対象とし、図書館に対する意見や考えを明らかにしていきたい。また、学生の図書館の利用状況により、図書館に求める内容が異なる可能性もある。今後は、図書館の利用頻度の高さや低さを考慮してグループを編成するなどし、学生の求める内容と図書館利用状況との関連性も明らかにしていきたい。

参考文献

- 1) 山鹿砂預子 (2009) : 法政大学図書館への“学生の声” 分析レポート, 大学図書館研究, 86 巻, pp. 38-46.
- 2) 逸見英枝・金山時恵・新藤慶 (2010) : 新見公立短期大学附属図書館の利用実態と課題－学生・教員へアンケート調査を実施して－, 新見公立大学紀要 第 31 巻, pp. 161-170.
- 3) 李強・小縣裕二・蔭山勝弘,・西浦素子・山田八重子・三羽信比古 (2013) : 平成 24 年度図書館学生利用者満足度アンケート集計結果概要, 大阪物療大学紀要, 1 巻, pp. 59-66.
- 4) 木下康仁 (2003) : グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践－質的研究への誘い－. 弘文堂, 東京.

本研究は, 科学研究費補助金・基盤研究 (C) (課題番号 : 20K03189, 代表者 : 辻 高明) の支援を受けている.